自立をめざす交流学習

ー複式低学年「宿泊交流学習を中心にして」ー

佐　和　真由美

1　はじめに

本校複式学級と東城町立帝釈小学校とは，それぞれの学習環境を生かした交流をめざして，１年おきに宿泊場所を変えながら，集会活動・体験活動・合同授業・教科の学習内容を深め合う学習活動などを行っている。

昨年度は，帝釈小学校の友達が本校を訪ね，低学年は共に，紙屋町・子ども文化科学館・もみじまんじゅう工場を見学し，本校に宿泊した。したがって，帝釈小学校を訪ねるのは，１・２年共に初めての経験であり，地図で場所を調べたり，お手紙をいただいたりするうちに，少しずつ自分たちがいつもと違う場所に自分たちだけで行くのだという実感を深めていった。

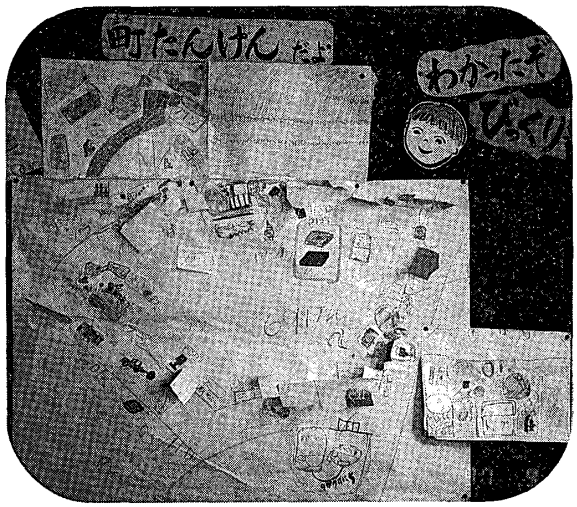
帝釈小学校では，全校あげての暖かい歓迎を受け，していただくばかりの２日間であったが，今回の宿泊交流が子どもたちの日常生活や学習活動の中に生きていることが分かり，あらためて生の体験をすることの大切さを感じた。

2　学習活動の中で

(1)　生活科との関わりを通して

①　「町探検」の地図を広げよう

９月の町探検で，秋が地図に加わって行く頃，「先生，帝釈小学校はどこにあるんですか。」という質問が出た。そこで，広島県図で場所を示し，町探検の地図を使って北へとテープを伸ばすと（テープは天井を伝わっていく）「うわ～遠いね。」「バスならどれくらいで行くんじゃろうか。」などと言い合い，「旅行に行って１時間車に乗っていたら…についたから…。」と今までの自分の経験を基に話が弾んでいた。低学年の子どもにとって，方位や何十キロという距離感はつかめないが，こうして地図でだいたいの方向を知ったり，どれくらい遠いかを自分の経験に照らして話し合ったりすることは，３年以降の社会科の学習にもつながっていくと考えられる。



おとまり学しゅう

十月二十二日水曜日はれ。ふくしきは，たいしゃく小学校におとまり学しゅうにいきました。バスレクをしながら３時間のっていました。11時25分くらいにつきました。・・・

②　秋見つけ～秋はおいしい～秋で遊ぼう

秋見つけから「町探検」に入り，子どもたちが出かけた所や身近な所から見つけた秋を集め始めた頃，東雲は温かな日々が続いていた。帝釈小学校に近づくにつれ，山が色づき始め，子どもたちから歓声が上がった。帝釈峡での昼食のため歩く道すがら，「あっちにもこっちにも秋があるね。」とお休みした友達に木の実や紅葉の葉っぱをお土産に拾い集めていた。また，道に積もった落ち葉を頭からかけ合って遊んだり，川に石を投げて遠くに飛ばしたりと自然を満喫していた。「こんなことができる

よ。」と働きかけなくても，子どもたちの意欲を喚起する環境があれば，活動は自然に生まれる。ということを実感した。

帝釈小のお友達に校庭にあるあきぐみの木から実を採って食べることを教えてもらったことは特に印象に残ったようだ。「木の実の味がする。」「酸っぱいけど種の回りが甘い。」などと言いながら，次の日も自分で採って食べていた。「あっちの木が，おいしいよ。」と教えてもらい，同じ木でも日当たりによって甘みが違うことにも気がついたようである。りんご園で「日に当たった赤いりんごがいいんだ。」と探して歩いていた。またこの時，おいしそうなりんごを鳥が先に食べていたのに驚き，「鳥はおいしい物が分かるんだね。」と感心していた。自分でもぎ採ったりんごの味は格別だったようで，りんごの嫌いだった子も食べられるようになり，どの子も大喜びで活動していた。

おいしい

…Nくんが「こっちにあきぐみがあるよ。」と言ったので，ゆびをさすほうにいってみると，小さなぶつぶつのあるみがありました。食べてみたら，すっぱくてさっぱりしておいしかったよ。

りんご

わたしは，りんごがりにいったとき，りんごはきらいだからたべられないなあ，とおもったけど，1こたべてみるとおいしかったので，バクバクたべました。とりたてだからおいしいんだとおもいました。

学校に戻ってからも，中学校の校庭に落ちていた木のみを拾ってきて「これは，あきぐみみたいに食べられないって聞いたけど，とってもいい匂いがするからもらってきました。」「りんご園で食べたりんごの匂いがするね。」と言い合いながら何日も手に取って匂いをかいでいた。秋に集めたもので作品を作る時にも，「帝釈にはたくさんのすすきがあったのに，この近くにはありません。」「紅葉の色が違います。あんなにきれいなのが見つかりません。どうしてかな。」「山だったからだと思う。だから私は，比治山に行ってどんぐりを拾ってきたの。きれいな葉っぱもたくさんあったよ。」「探せば公園にもあるよ。」と積極的に秋を集めて作品にしていった。

また，樽で育ててきたピーナツなどがとれた時に，虫食いのあるのを見て，「このピーナツはおいしいから食べたんだね。僕も食べてみよう。」と大切に持ち帰った。以前の子どもたちだったら悲しそうな声を上げ，食べようとはしなかっただろう。帝釈での経験が，子どもたちの物の見方を変えるきっかけになったと言える。

(2) 総合的な学習（人間領域）～みんなで遊ぼう～を通して

「帝釈のお友達は，どんな遊びをしているのかな。」「私たちのお薦めの遊びも教えてあげたいね。」と話し合ってはいたが，低学年の子どもは半数が入れ替わっているので，恥ずかしさも手伝って，なかなか自分から話をすることができなかった。それでも，クラスでの紹介ゲームやハンカチ落としを終える頃には，緊張も和らぎ，笑顔が見られるようになった。

この後，グループに別れて校庭を案内してもらった。あきぐみを採って食べたり，木に登ったりと，日頃の生活では味わえない自然を感じる遊びが，強く印象に残ったようである。

また，「このブランコは同じだ。」「あの鉄棒は少し違う。」などと遊具にも関心を示して，次の日遊んで確かめていた。こういう時，必ず帝釈小のお友達が側にいてくれて，自分たちも遊びながら遊び方を見せてくれていた。ここで遊び方を聞いたり，いろいろなことを話し合ったりできればよいのだが，ついつい自分たちで集まってしまい，自分たちで輪を広げていくことができなかった。

このため「仲良くしたいのに…」という気持ちが残り，どうやって相手に自分の話したいことを伝えていくのか，聞いていくのかというコミュニケーションの大切さを実感するよい機会となった。

２日目。空き時間に校庭で遊んだ。ここでは教師も入って一緒に楽しむことにした。お互い自分たちの知っている遊びが相手には分からないことに，少し戸惑っていた。しかし，話している内に色おにと影ふみおにならみんなでできることが分かって，早速遊ぶことになった。遊ぶ中で，「日陰は，東雲より寒いね。」「先生，帝釈小のお友達は，足が速いです。」と自分たちと比べて考え，様々なことに目を向けていた。

11月･12月のテレビ電話による交流では，「今，あきぐみは，どうなっていますか。」「雪は降っていますか。どんなことをして遊んでいますか。」と質問をした。遊び時間は少なかったが木から採って食べ，種をとばしたあきぐみのことや，いろいろな思いを抱いた遊びのことが後々まで印象に残ったのは，自分の体や五感を通して感じ取ったからであろう。

また，帝釈のお友達とテレビ電話で会えると知った時の子ども達のてきぱきと準備を進める姿から，たくさんの人と関わり合える場を設ける大切さをあらためて感じた。

3　日常生活の中で

(1)　楽しさから身辺自立へ

本校の子どもたちは，各地域から公共機関を利用して通学をしている。発達段階に応じて，他との関わりの中で，自ら考え，判断し，行動できる子どもをめざし，まず登下校から始めようしているのである。入学前から練習をする子もいて，自力登下校はできているが，最も基本となる身辺自立がまだ保護者に支えられている子もいる。今回の宿泊学習が，あらためて身辺自立ができているかを自覚するよい機会となった。荷物を自分で管理する・自分で寝起きができる・寝具の準備や後片づけができる・挨拶や返事ができるなど基本的なことが，低学年のうちにできていることが大切である。自分たちがただ楽しくて，帝釈小のお友達に頼りっきりの場面も多く見られた。しかし，学校に帰って落ち着いて振り返ると，自分の今の力がどうなのかに気がついたようである。自分の持ち物の管理や整頓などを日頃からきちんとしておかなければ，自分も困り，他者にも迷惑をかけるということが分かり，自分から心がける子が増えてきた。

これも，楽しく過ごさせてもらった，お世話になったという思いがたっぷりとあったため，楽しく振り返るうちに，その時の自分はどうだったのだろう，と素直に考えることができたのだと思われる。

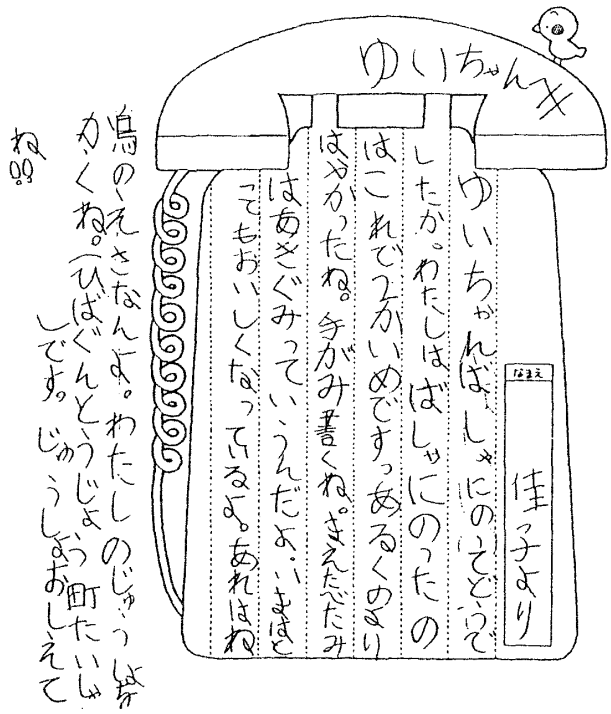
(2)　豊かな他との関わりから自立へ

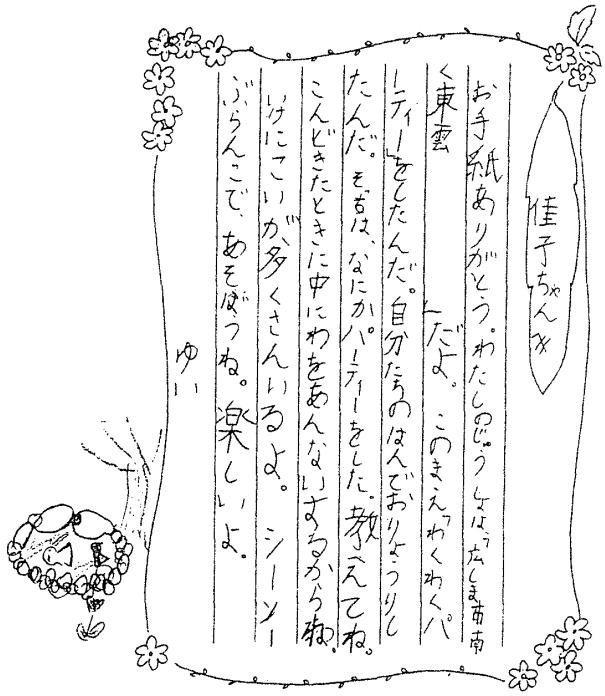
複式は，１クラスに異学年がおり，縦割り活動も盛んである。異学年の行動や考え方をよいお手本として生活することができる。それに加えて，帝釈小との交流で，より広く他者と触れ合う機会がもてる。生活環境や自然環境の異なった友達と一緒に宿泊をしたり活動をしたりすることが，自分の学校や自分と比べてみたり，自分を振り返ったりするよい機会になっている。

自分から積極的に他校の友達の中に入っていくことはまだできないが，友達の思いやりや優しさに触れ，もっと仲良しになりたいという気持ちは深まっている。テレビ交流の時も，とても楽しみにし，K君たちに自分たちをしっかり見てもらうには大きな動作・はっきりした声がよいと練習をしたり，順番を話し合ったりしていた。この気持ちを大切に育てていけば，交流を重ねる度に，より積極的に自分を表現することができるであろうし，誰とでも仲良くできるということで自信がつき，もっと大きな集団の中でも，異なる集団の中でも，自分を表現することができるようになると思われる。

4　おわりに

帝釈小学校の皆さんの暖かさに包まれた交流宿泊学習であった。「楽しかった。嬉しかった。」と言う満足感を子どもたちがたっぷりと味わうことができたため，自分たちは？と今の自分を振り返るとてもよい学習の機会となった。また，生活科の「わくわくパーティー」では，どんな気持ちで準備をして下さったのか，というもてなす側の気持ちを感じとることができ，いっそう帝釈でのお友達との交流が楽しく思い出されたようである。以下は，帝釈小学校のお友達と本校の子どもたちの手紙である。





帝釈小学校との交流を通して，自分が関われる人や場所や自然が増えていくことが，自分で考え，判断し，行動するための基となる知識や経験，そして感性を豊かにしていくことにつながるということをあらためて感じた。

大喜びで手紙を書く子どもたちの姿から，来年は…とお友達との再会を楽しみにしているのが分かる。少人数の複式だからこそ繰り返すことができる交流宿泊学習を，今後も大切に続けていきたい。